

2019/04/28

「あなたは何をしている？」

■いつまでも残るもの

「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」（I コリント 13:13）

「いつまでも残るもの」は「信仰と希望と愛」しかありません。つまり、「信仰」「希望」「愛」に関わることを行なっていなければ、何もやっていないということになります。いつまでも残るものに参加して初めて、私たちは自分を生きたということになるし、何かをしたということになるのです。

「信仰」「希望」「愛」を残すことが人生の意味であり、それ以外はゼロになります。あなたの人生は、何かを残すことができるものになっているでしょうか。結局は消えてなくなるものに労苦してはいないでしょうか。

■「愛」とは何か

「信仰」「希望」「愛」の中で最も優れていると言われるのは「愛」です。聖書が教える「愛」とは、私たちが想像する愛とはまったく異なります。いったいどのような「愛」なのでしょう。

「また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」（I コリント 13:3-7）

1. 愛の基準は行いではない

貧しい人に施したり、自分のからだを捧げたりすることは、この世界では紛れもなく「愛」です。しかし、そこに「愛がなければ」と言われているということは、どんなに立派な行いをして「愛」ではないことがあるということです。なぜなら、「愛」とは「行い」ではなく、心のありようだからです。

2. 愛は見返りを求めない

「愛」とは、「寛容・親切・ねたまない・自慢しない……」などと教えられていますが、一

言にまとめるなら「怒らない」ということです。では、人はどういう時に怒るのでしょうか。それは、相手が自分の期待に応えてくれない時です。私たちの行動は、必ず見返りを求めています。「ちょっとほめてもらいたい」「ちょっと認めてもらいたい」そういった願望に対して、相手が応えてくれないと怒りが生じるわけです。

それに対して、その「見返り」を求めないことが「愛」だと聖書は教えます。もし「見返り」を求めることが動機に含まれているなら、それは愛ではありません。

さらに聖書は「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍ぶ」ことが「愛」だと教えます。それは簡単に言うと「神のことばを食べること」です。この世の物に見返りを求めないためには、別のもので心を満たす必要があります、それは「神のことば」を信頼することです。神のことばに期待して留まるなら、心は満たされます。

見返りを求めないだけでなく、心を「神のことば」で満たすことが「愛」なのです。それは、「神に近づこうとする運動」です。

3. 愛とは神を信頼する運動

私たちが普段行っているのは自分に関心を引くための運動です。しかし、聖書が教える愛とは、神に向かって進むことです。神に目を向け、神に向かって生き、神との距離を縮めていく「神に近づく運動」が「愛」であり、それは「信仰」と呼ばれます。

神に近づくとき神に愛されている自分が見えてきます。神に愛されている自分がわかると、希望が見えるようになります。それで、「信仰」「希望」「愛」は一つなのです。つまり、「愛」とは、「神に近づこうとする運動」であり、別の言い方をすると「神を信頼しようとする運動」だということになります。これだけが「いつまでも残るもの」です。

なぜ神は私たちにそれを求めるのでしょうか。それは、人が神に似せて造られ、私たちの魂は神のいのちで造られたものであって、誰もが神に捕らえられているからです。だから、魂は神を慕い求める運動しかできません。しかし、この有限の世界では神が見えず、神に近づくことができません。

「永遠」とは制約されない世界ですから、この世界では「自由」ということになります。そこで神を求める魂は、自由を求めて生きています。しかし、この世界では自由にも制限がありますから、それは「可能性」に置き換えられます。それで、人は自分の可能性を求めて生きています。それは、本当は魂が神を求めていることの表れなのです。

私たちは、本当は神を求めていることに気づかず、可能性を求めて何ができたかを称賛されることで魂を慰めて生きています。

そこにイエス・キリストがあらわれて、永遠に残るものは愛であり、それは神に近づくことだと教えてくださいました。「もっと神を目指して生きよ。それだけが永遠に残るものだ」とイエス様は教えてくださったのです。そして神に近づくとき、私たちは平安な義の実を結ぶのです。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」（ヘブル 12:11）

■神に近づく運動は「冒険」

この運動に参加するということは「冒険」です。神の見えないこの世界に於いて、人の知恵で神を知ろうとすることは不可能です。ですから、有限の世界から永遠の世界の神を見るということは、ある種の冒険と言えます。愛とは冒険なのです。

1. 自由を求める「冒険」

神に造られた私たちの魂は「自由」を知っています。ところが、有限の世界では自由にも制限がかかり、それは自由ではなく「可能性」にしかありません。私たちの魂が知っている愛はもっと素晴らしいものです。そのため、この世界の愛とは大きなギャップがあります。そこで、そのギャップを埋めるのが、神に近づこうとする「冒険」です。神のいのちの声を聞き、神に近づくには勇気が必要です。ですから、神の声に従って生きるか、有限の世界で何も残らないことに妥協するかを選ぶのは、「冒険」なのです。

2. 信じることから始まる「冒険」

この「冒険」は、イエス・キリストを信じるところから始まります。人の知恵で、神を知ることにはできません。「信じること」そのものが「冒険」です。この「冒険」をしなければ、何も始まりません。

3. イエス・キリストと共にする「冒険」

この冒険は、ひとりでするものではありません。イエス様が支え、イエス様が神に近づけてくださるので、イエス・キリストがいつもあなたと一緒にいる冒険です。

この冒険をする選択をする時、あなたは初めて自分を生きることを選択したことになります。それを選択しない限り、生きていないし、何かを選択していることにもなりません。それは、ただ教えられたことに反応しているだけであり、人から良く思われるために自分をつくらせて生きているだけです。

自分を生きるとは、あなたの心の声を聞き、選択することです。私たちの魂は、死を求めているわけではありません。憎むことを求めているわけではありません。なぜなら、人は皆神に造られ、神に捕らえられているからです。

魂は永遠を知っているのに、現実はそのようではないという、そのギャップを埋めるのが信仰であり、愛なのです。私たちの魂は、神に近づこうとする運動が必要です。それを選択する時、人は初めて何かをしていることになるのです。

■神に近づく運動の方法

1. 困難にぶつかったら祈る

困難な出来事にぶつかったら、とにかく祈ることです。聖書は、「患難に出会ったら喜べ」と教えています。なぜなら、困難な出来事は神の約束の言葉を信じるという冒険を始めるチャンスだからです。聖書はあなたが困難に出会う前から、「試練と共に脱出の道が用意されている」「恐れるな。私があなたと共にいるから」と約束しています。ですから、困難に出会ったら、神の約束の言葉を信じる冒険を始めましょう。そうすることで神に近づいていくことができます。そのためには、祈るしかありません。

2. 罪に気づいたら祈る

私たちが罪を犯すのは、不安だからであり、その不安は神の愛が見えなくなったことから生まれています。この世界は神の愛が見えないので、人は見える安心をむさぼるようになり、そこから悪い行為も生まれました。罪は私たちをむしばむ病気です。神に近づくとは、神に罪を癒してもらう運動でもあります。罪を隠し持っている、やがて罪責感で身動きができなくなってしまいますから、罪に気づいたら神に近づきいやしてもらいましょう。神は罪を赦してくださいますから、罪を差し出すことで神に近づくことができます。そうすると、主が全ての罪を赦し、治療して神の愛が見えるようにしてくださるのです。

3. 「平安」が来るまで祈る

神は、すべての苦しみに対して私たちを助ける約束をしてくださっています。私たちが苦しむのは、その神の約束の言葉が信じられないからです。苦しみの本当の原因は、神の約束が信じられないところにあるのです。ですから、神の言葉を信じる冒険を始めましょう。神のことばを信じることができれば、たとえ困難な状況にあっても平安を保つことができます。祈りとは、信じられるようになるためのものです。信じるために祈るのです。そうすると、それができるように、主が支えてくださるのです。

これらが、神に近づく運動です。神に近づく運動をして、冒険を始めるなら、私たちは平安な義の実を結ぶようになります。

■平安な義の実を結ぶとどうなるか

1. 罪深い自分を受け入れられるようになる

多くの人は、現実の自分を見ないようにしています。現実の自分は、死の恐怖の奴隷で、わかっても悪いことをやめることができない惨めな自分です。その自分を見るのがつらいために、理想を描いて本当の自分を捨てて生きています。しかし、神が愛するのは、現実のあなたです。私たちは神に近づけば近づくほど、神が弱い私を愛し、弱さの中に神が働い

ておられることに気づきます。そして、神が愛する弱いあなた自身を素直に受け入れることができるようになるのです。

2. 人をさばかなくなる

現実の自分を受け入れられるようになると、人を受け入れられるようになり、さばかなくなります。

3. 感謝できるようになる

ありのままの自分を受け入れられるようになると、感謝があふれるようになります。私たちの苦しみの源は、自分を好きになれず、自分を受け入れられないことです。しかし、神に近づけば近づくほど神に愛されている自分を知り、自分を受け入れられるようになり、感謝できるようになるのです。

これが、「何かをしている」ということになるのです。選択し、決断し、冒険して生きることが、自分を生きることです。しかし、それ以外の選択は「何もしていない」人生だと言われます。

「信仰」と「希望」と「愛」に目を向けて、この世の中で様々なことを行なっている私たちですが、何をするにしても、全てのことを神との関わりの中で行ないましょう。それが神のことばを信じて生きていく冒険です。自分の人生を自分で選択して生きていきましょう。